

ある体験

東京都美術館の画廊で僕は息をつまらせた
押さへつけるゼラチンのやうな透明なもの
「男」からはじまる麻生三郎展
ああ はげしい拒絶
乾燥のためのひび割れのこまかい線條は明確であり
みづみづしい画面 生の流動を辿ることも出来るのに
しかるに僕の顔面に強烈な圧力がかかった
身体をほそめてやつと歩を進める
周囲の空間には画面を見つめてゐる多くの男女
太つちよの少女 青白い顔の青年 みんな移動に骨折つてゐる
描出されてゐる男女は眼球をぶんなぐられたやうに泣きはらして
大空襲のあつた翌朝に似てゐた
僕は突き進んで行くより仕方なかつた
「生きてゐるけはひ」の場所に來た時
魔法がとけるやうに ほつとした
僕は 急に自由な気持になつて きびすをかへした
「男」から見なほしはじめた
絵の具の積み重ね はね上げた手法
限りなく絵の具をうづめ込む手法 画面にしづむ觀念
麻生三郎は心中の片割れではないか
ふたたび「生きてゐるけはひ」の前に立つた
突然 何かが束になり うなつて さつきよりひどい力が僕を打つた
恥 高慢 過去 黒い死 茶色い死 白い死
東京都美術館の画廊はゆれて傾き
窓からは 木立と空の破片が かがやきながら飛び込んで來た
またしても 拒絶
如何なる時代 そして何処に
麻生三郎は存在するのであらうか
国籍なんかないのではないか
でも いつか この難解な迷路を 僕はときほぐしてみせる
僕も心中の片割れの生き残りなのだから
東京都美術館の陳列は蜿蜒とつづく
麻生三郎の画面も蜘蛛とつづく
その拒絶も